



『グラスロード』

脚本：アストン＝路端
画像：コミポ！

www.comipo.com

『正倉院（しょうそういん）』

東大寺大仏殿（どうだいじだいぶつでん）の北北西に位置する

校倉造（あぜくらづくり）の高床式倉庫（たかゆかしきそうこ）である。

聖武天皇・光明皇后ゆかりの品を始め

日本、中国（唐）、西域、ペルシアなどからの輸入品を含めた

絵画・筆跡・金工・漆工・木工・刀剣・陶器・ガラス器・楽器・仮面など

天平時代（てんぴょうじだい）を中心とした美術工芸品を多数収蔵している。

文化財の一大宝庫であり、国宝に指定（一九九七年）、

ユネスコ世界遺産に登録（一九九八年）された。

シルクロードの東の終着点とも言われる。



外国製の宝物は

唐、新羅、渤海などから

船で日本に運ばれた。

唐の都、長安には

シルクロードを通じて

世界各地の文物が集まっております

日本は遣唐使を送って

文化を学んでいた。

正倉院に残された宝物は

国際交流の在った証とも言える。

遣唐使の目的は

当時の海外情勢や

中国の先進的な技術

仏教の経典等の収集であり

『旧唐書』には日本の使節が

中国の皇帝から賜った宝物を

市で売って金に換え

膨大な書物を買ひ込んで

帰国したと言う話が残されている。

『白瑠璃碗（はくるりのわん）』

正倉院に納められた工芸品の一つで
六世紀頃、サーサーン朝ペルシアにて
制作されたと考えられている。



ペルシア、あるいはペルシャとは
現在のイランを表す古名であり
当時の国境を越えた交流が
盛んであったことを忍ばせる。

遣唐使の派遣は
全部で二〇回※

延べ四〇隻が往復して
うち六隻ほどが
遭難や難破をしている

荒波を乗り越えた
貴重な品物だと
言えるだろう

事故率約14%

航空機の事故率は約1%

※諸説あり



『ガラスロード』

脚本：アストン＝路端
画像：コミポ！

www.comipo.com

ガラスの歴史

ガラスは砂、珪石、ソーダ灰、石灰などの原料を摂氏千二百度以上の高温で溶融し、冷却・固化するという工程で製造された。

紀元前一五五〇年頃には、エジプトで粘土の型に流し込んで器を作るコア法による最初のガラス器が作られ、西アジアへ製法が広まった。



紀元前一世紀後半にエジプトのアレクサンドリアで宙吹きと呼ばれる製造法が發明されると、安価なガラスが大量に生産されるようになり、食器や保存器等に用いられるようになった。この技法は現代においても使用されるガラス器製造の基本技法である。

この技法はローマ帝国全域に伝わりローマガラスと呼ばれるガラス器が大量に生産された。この時期には板状のガラスが鑄造されるようになりごく一部だが窓にガラスが使用されるようになった。

しかしローマ帝国の衰退とともにヨーロッパでの技法は停滞した。

一方、ビザンツ帝国の治める地中海東部やサーサーン朝ペルシアや中国の北魏や南朝では引き続き高水準のガラスが製造されている。

とある

サーサーン朝ペルシア

遣唐使

サーサーン朝が栄えたのは西暦二二六年から西暦六五一年まで

遣唐使の派遣は西暦六三〇年から西暦八九四年だから

この白瑠璃碗は最後に制作されたガラス器かも…そして



ペルシア人と日本人が出会ったとすれば

長安

ここしかない!!!



当たり前でしょう
当時の交易の
中心地なんだから

交易品なのか
来日したのか
知りたいよね

説明
宜しく

踏み込
まれた!?



『日本書記』によれば

西暦六五四年

「とからのくに」から日向に
乾豆波斯達阿なる人物らが
漂着したとされている。

「とからのくに」はトカーレスターン

乾豆はトカーレスターンの地名

クンドウズ

波斯はペルシア

達阿は王族の名である

ダーラーイだと言う説がある。

七世紀後半のトカーレスターンには

サーサーン朝ペルシアの亡命政権があった。

サーサーン朝最後の王、ヤズダギルド三世には
二人の王子と三人の王女がいた。

王子ペーローズは群臣と共に山中に逃れ
トカーレスターンにて王朝の再興を図り

西暦六五四年、唐に援助を求めたが

遠方と言う理由で軍事援助は得られなかった。

その後単独で故国に戻ろうとしたが果たせず

後にアラブ軍の侵攻を受け

トカーレスターンから唐に亡命した。

話は変わるが

古代オリエント世界では伝統的に

王が臣下と会食する際は

食事が盛られた器まで分け与える習わしがあり



特に正倉院の白瑠璃碗の系統は

サーサーン朝ペルシアの王が臣下の貴族や豪族に

下賜するために作らせた非常に特殊な品で

基本的に売り物ではなかったと言う説がある。

西暦六五四年の
亡命と漂着

更に白瑠璃碗が
王族の私物

つまり

がーん

俺のセリフ…



交易品
ではなく
献上品



なるほど

難しいところね



じゃあ
直接の国交は
無かったん
ですか？



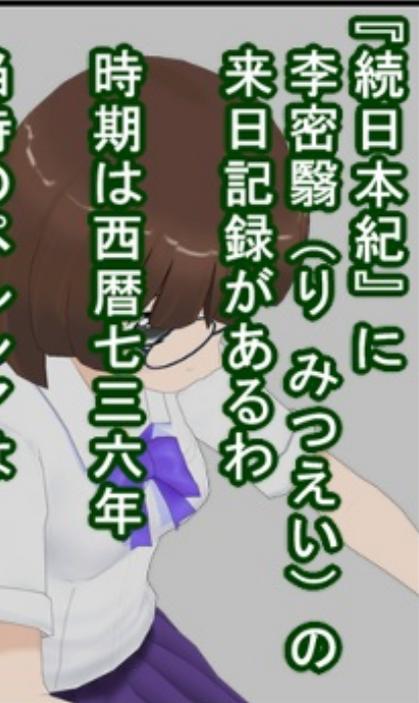
長安で合流して
そのまま来たのでしょ



遣唐使の帰国に
合わせたものだから

と言っても

当時のペルシアは
イスラム帝国に滅ぼされて
アラブ人の支配下に
あったみたいね



時期は西暦七三六年

『続日本紀』に
李密翳（りみつえい）の
来日記録があるわ





目の前に示されたのは

同じガラスの器だったけれど

背景となる物語を知れば

まるで印象が変わっていた。

準備はまだ

始まったばかりだけれど

当たり前の日常が

一新されるような気がしていた。



『ガラスロード』完

カル
けん!!

カルけん！！（２６）

<http://p.booklog.jp/book/102181>

著者：アストン＝路端

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/robounoishi2009/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/102181>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/102181>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ